

## 夏の仲間たち

樋口 鳳香

「河童って、肝を食べるって知ってる？」

早めの夕食が終わって、食器もあらかた片づけ終わるころには、すっかり日も暮れて、毎年恒例の文子ねえちゃんの『こわい話』がはじまった。

みんなで囲っていた円い食卓を部屋のすむに移動して、食卓のあった場所に高校生の文子ねえちゃんが座った。子どもたち五人はふすまを背に、横一列のひざを抱えて座る。そうやって聞くのが毎年の決まりだ。

「キモってなあに？」

ドキドキしながら聞くと、

「内臓だよ。内臓って知ってる？」

話を聞いているのは五歳から十一歳。文子ねえちゃんは、一番小さな子にも分かるようにゆっくり話して聞かせた。

「内臓って、お腹の中にあるものだよ。河童

「はね、人の内臓を食べるの」

文子ねえちゃんは、だんだんと声をひそめた。まるでとなりの部屋にいる誰かさんに聞こえちゃまずい、秘密の話をするように。

子どもたちはそれぞれに、後ろをふり返るそぶりをする。ふすまの向こうの部屋に誰もいないのは知っているけど、文子ねえちゃんの話の聞いているうちに、明るかったときには見えなかった『なにか』がいるような気が、し始めるのだ。

「わー」

「こわいよ」

「いやだ」

子どもたちは、めいめいに声をあげて、ひんやりと背筋が寒くなるようなその場の空気を打ち破ろうとする。

五人がそれぞれ、ひとしきり好きに声を上げ終えると、あたりはしん、としずかな夜になった。土間の暗がりから食器を洗っている音が聞こえてくる。

カチャカチャ、カチャカチャ……。それはおぼちゃん、つまり文子ねえちゃんのお母さんが水場で食器を洗っているのだけど、子どもたちの場所からは壁が邪魔をしておぼちゃんの姿は見えず、カチャカチと陶器のぶつかる乾いた音と、じゃあじゃあ、ぽたぽた……。水の音だけが聞こえてくる。実は壁の向こうにいるのは、おぼちゃんじゃなくて『なにか』だったらどうしよう……。子どもたちの心の中は、不安でいっぱいだ。

「どうやって食べるの？」

そのとき、勇気あるひとりが聞いた。

「それはね……。」「

文子ねえちゃんは、すぐには答えずに、その場にいる子どもたち五人の顔をひとりずつ、じーっと長いこと見つめていた。

文子ねえちゃんの大きな目は底の見えない黒い沼のようで、見られた方は、自分の背後になにか得体の知れないものがあるんじゃないかって怖くなって、抱えたひざを少しずつ

となりの子に寄せるようにする。

「……お尻の穴から取るんだよ」

「えっ？」

「おしりだって！きつたなーい」

一番年長の、五年生のキミエちゃんが声をあげて笑った。

わたしもウンチまみれになっている河童を想像して、なんだか笑ってしまった。

「笑いごとじゃないんだよ！」

文子ねえちゃんが、ぴしやりと叱りつけるような声で言った。

「みんな本家のおトイレは使ってみた？」

みんな首ふり人形みたいに、肩を上げたまま、そろって首を横にふる。

本家というのは、広い田んぼを三つばかり越えた先にある大きなお屋敷のことだ。ものすごく古くて、外観はおばけ屋敷みたい。中に入ると、どの部屋もすごく広くて、家中が昼間っからうす暗い、気味のわるいお屋敷。夏休みにこうして親せき一同が集まるときは、

本家にたくさんある部屋を、それぞれの家族が旅館のように分けて使っていた。

その屋敷のトイレは水洗じゃなくて、便器の下は奥行きが見えない穴がある。ぼつとんトイレなんだよ、ってお母さんは話していた。危ないし汚いから、トイレはとなりの別棟のものか、文子ねえちゃんの家のを使わせてもらいなさい、とお母さんに強く言われていた。「あそこでね。用を足しているとね。……河童がお尻の穴に手を入れて、肝を持って行っちゃうんだって」

言い終わると、文子ねえちゃんはニヤリと笑った。こわいマンガに出てきそうな、不気味なほほえみだった。

子どもたちの顔がいつせいに、ききき……とからくり人形のようにこわばっていく。それに反して、文子ねえちゃんは嬉しそうだ。

文子ねえちゃんはいつも、こわがる子どもたちがそのやわらかな眉間をこわばらせると、にこにこうれしそうに笑っているのだ。ちよ

つとイジワルなのもしれない。

「やだよー、おかあさーん、こわいよー」

そう言っつて、五歳のみやこちゃんが泣き出した。みやこちゃんが、いところの中で一番年下で、一番のこわがりさんだ。

みやこちゃんは、

「おかあさーん、おかあさーん」

つて、くりかえし呼んだけど、東京にいるみやこちゃんのお母さんにはその声は届かないだろう。

夏休みは子どもたちだけで、おばあちゃん  
の住むこの田舎町にそろつて二日間お泊りする  
のが、わたしたち親せきの恒例行事だった。  
みやこちゃんはまだ小さかったから、去年ま  
ではお母さんと先に帰ったけど、今年はお兄  
ちゃんのケンゴといっしよに、子どもだけのお  
泊まり会にはじめて参加したのだ。  
「そんなの作り話だ！河童なんかいない  
よ！」

妹のみやこちゃんをかばうように、ケンゴ

は大きな声をあげて、文子ねえちゃんに食ってかかった。

東京の下町で暮らしている四年生のケンゴは、いつだって威勢がいい。毎年、地元のお祭りに参加しておみこしをかつぐんだって。今年も、みやこちゃんといっしょにとった写真をたくさん持ってきて、見せてくれた。

ケンゴは威勢がいいだけでなく、勇気があって、なんでもひとりでやろうとする。飛行機だって、空港までの送り迎えさえあれば、ひとりで乗って来る。今年はなんと、みやこちゃんとふたりで来たんだって。わたしとたった一歳ちがいののに、ケンゴは勇気と行動力のあるスーパー小学生なのだ。

「おにいちゃん、ほんと？」

「いないよ。だって見たことないし、東京じゃ、そんな話聞いたことないだろう？」

みやこちゃんは、うん、うん、としきりにうなづいていた。ふだんからみやこちゃんはお兄ちゃんの言うことをよく聞く、良い子だ。

それでもまだ半べそをかいているみやこちやんを、文子ねえちゃんが抱きあげようとした。昼間なら、いつでも文子ねえちゃんにくつついてちよつとでも手をつなぎたがるのに、こわい話をした後は、みやこちゃんは文子ねえちゃんに近づこうとはしない。

文子ねえちゃんは、困ったような顔をして、「さあ、今から本家まで送ってあげるから、ここでおトイレすませていった方がいいわよ」

と、また子どもたちをこわがらせた。

わたしたちは文子ねえちゃんの声を合図に、いっせいに群れをなしてトイレに押しかけた。使う順番は周囲の田んぼにひびき渡るような大きな声のじゃんけんで決めた。それから、みんなでお約束もした。もしもの時、それは河童が現れたときにすぐに逃げられるようにトイレに鍵をかけないこと。それから誰かひとり必ずドアの前で見守ること。

そうやって、ひとりトイレから出てくるた



びにワアワア大騒ぎしながら、全員が寝る前の用を水洗トイレですませることができた。

「さあて、じゃあ、本家に帰るわよ！」

本家への帰り道。わたしたちは手をつないで歩いた。文子ねえちゃんを入れて六人。田んぼと田んぼの間にある舗装路は、六人が横に並んでちようどの道幅だ。街灯はほとんどないため田舎の夜は真っ暗で、左右にある田んぼは、人を丸飲みにする怪物の口のようにだ。

黙っているのはこわいから、誰からともなく歌を歌いはじめた。田んぼからゲロゲロと鳴き声がしていたせいだろうか、選曲はカエルが登場する歌で、こわさを吹き飛ばすにはちようどよく、六人の輪唱がはじまった。

みんなでゲロゲロ、ゲロゲロと大げさに歌っているうちに、なんだか楽しくなってきた、つないだ手を大きくふりながら、笑いながら夜の田んぼ道を歩いた。



翌朝。

「河童を探しに川に行こう！」

とは、誰が言い出したのか。

かきこむように朝食を終えたわたしたちは、宿題も放ったらかしに、それぞれにすっかり探検家気分で、川へ出かける準備をはじめた。

幼稚園年長のみやこちゃんも、お餅みたいな手をいそがしそうに動かして荷物をつめていた。ひまわり色したりユックサックの中をのぞいたら、ぬいぐるみのクマのミーちゃんと、夏祭りのくじで当てたピンク色のおもちやのサングラスが入っていた。

台所では、急なリクエストにおばあちゃんがせつせと五人前のお弁当をこしらえていた。

「おばあちゃん、卵焼き、甘いのがいい」

「からあげ、いっぱい入れてね」

「梅ぼしのおにぎりは、やだよ」

「みかんのゼリーがいいな」

「おばあちゃん、キュウリいっぱいだよ」

それぞれが好き勝手に注文をしたので、おばあちゃんはてんでこまいだ。そのうちに文

子ねえちゃんも手伝いに来た。

「ほんとうに、河童探しに行くの？昨日あんな話したのに、みんな、勇気があるのねえ」

文子ねえちゃんは、楽しそうにみんなの顔をのぞきこんだ。

「肝、とられちゃうかもよー」

と、文子ねえちゃんは昨夜の調子でみんなをおどかすけど、おてんとうさまがキラキラかがやいているこの時間、文子ねえちゃんの『こわい話』は効力がない。ひとり以外は、みんな平気な顔をしていた。

「取られそうになったら、どうしたらいい？」

泣きそうな顔のみやこちゃんに、文子ねえちゃんは台所に転がっていた摘んだばかりのキュウリを一本つかませた。

「河童はね、肝よりキュウリが大好物だから、これを持っていれば大丈夫」

と言って、大きく膨らんだ黄色いリュックを背負ったみやこちゃんの頭をなでなでした。

「さあ、行くぞ！」

ケンゴのかけ声で、みんなまるで行進曲でもかかっているみたいに両手、両足を快活に動かして歩きはじめた。目的地は河童が住むと言う川だ！さあ行くぞ、えいえいおー！みやこちゃんは、一番後ろを歩くわたしの前で、キュウリを旗のようにふりながら歩いていた。

川にはこれまで何度か、文子ねえちゃんやおばあちゃんに連れられて来たことがあった。おばあちゃんが来るときは必ず大きなバケツを持ってくる。目的は水あそびじゃなくて、タニシ取りだ。子どもたちも手伝ってタニシをたくさん取って帰るのだ。そして、その日の夕ご飯には、甘く煮た川の巻貝が登場する。

だけど、タニシが嫌いな文子ねえちゃんは見向きもしない。文子ねえちゃんと来るときは、もっぱら水あそびだ。わたしたちは水着に着替えて、はしゃぐ子犬のように遊びまわる。川の水はひざ下までしか深さが無いので、泳ぐことはできないけど、水てっぽうを使っ

たり、おもちゃのバケツを使ったりして、水かけごっこや魚とりを楽しむのだ。

雑草をふみしめながら十五分も歩いたら、河原に着いた。れんたーい、止まれ！

わたしたちは川が見下ろせる土手に一列に立ち止まって、辺りを見わたした。周囲は風が吹くたび、ざわざわと波立ちながら音を立てる、緑の海だった。緑がどこまでも深い。その背後には青々とした新緑をたたえた山があった。富士山みたいに立派じゃないけど、この町では天狗が住むって言われているんだって。これも去年の夏、文子ねえちゃんから聞かされた話だ。だから神様の山なんだって。

壮大な景色を目の前に、天色の空からふりそそぐ太陽光を浴びながら、みんなぽかーんと立ち尽くしていた。河童はどこからやって来るんだろう……。

「ねえ、河童が現れるまで、ずっとここで見張っているの？」

とわたしが聞くと、一番年上のキミエちゃん

んはちよつと考えるようにして、  
「そうね。ただ、待っていても仕方ないし：  
：なにかして遊んでようか」

と言った。

「川あそびしたい」

と、みやこちゃん。みやこちゃんはお泊まり会にはじめて参加したのだから、川に来るのもはじめてだった。きっとこれまでお兄ちゃんであるケンゴに楽しい話をいっぱい聞かされてきたんだろう。わくわくのかくせない目が、こもればいのように輝いていた。

「よしっ、じゃあ水あそびするか！」

と、隊長気どりのケンゴが言った。

やったあ、とその場で飛びはねたみやこちゃん。最初は、すぐに洋服を脱ぎだした。ワンピースの下は、金魚みたいな赤色の水着だった。「でも、泳いじゃダメって、おばあちゃんが言ってたからね。浅いところだけよ」

と、キミエちゃんが釘をさす。

「はあい」

と言うが早いか、みやこちゃんはとっくに川の中でバシヤバシヤと遊びはじめた。

後に続くようにケンゴも河原でシャツを脱ぐと、短パンのまま川に入っていた。

あーあ、わたしも水着もつてくればよかつたなあ、洋服のまま遊んだら、きつとおばあちゃんに叱られちゃうよ。と川原で石を積んでいると、バシヤツと水をかけられた。見るとみんな洋服のまま、みやこちゃんを中心にびしょぬれになって遊んでいた。

「早く、いつきちゃんも、おいでよー」

「すずしくて、気持ちいいぞー」

ひとたびぬれると、あとはどうにでもなれ、という気持ちになって、麦わら帽子とサンダルを石の上にぽいっと放ると、短パンの裾をまくりあげて川の中に入っていた。

遊びはじめれば、小さな気がかりは全部ふき飛んでしまう。目的だった河童のことだつて、みんな忘れているみたいだし、おやつの時間までに帰っておいでと言われたけど、時

間だっでもう関係ない。かけて、はねて、笑  
って……。子どもの夏時間は、あつという間  
に過ぎていく。

そうしているうちに、のどがかわいて、み  
んな転がるようにして川べりに戻った。おば  
あちゃんが用意してくれた麦茶の入っている  
大きな水筒から、プラスチックのコップにた  
っぷりと注ぐ。ごくごくごく……。冷蔵庫で  
冷やしているわけじゃないのに、おばあちゃ  
んの麦茶は魔法みたいに体をすうすうと冷や  
してくれる。

「わたしも」

「ぼくも」

と、コップを順に回していると、

「おにいちゃあーん！ーん！」

と遠くから、みやこちゃんの声が聞こえて  
きた。みんながいつせいに川に向いたけど、  
さつきまでみんなで遊んでいた浅瀬にみやこ  
ちゃんの姿はなかった。

「あつ、あんなところにいる！」



ケンゴが指さした先は、岩場のある下流の方だった。

大きなゴツゴツした岩の頭の間で、みやこちゃんの白い顔がぷかぷか浮いて見えていた。きつと足がギリギリ立っているんだろう。水の表面はみやこちゃんのおごのあたりまであって、ときどき水を飲んでしまうのか、口を上に向けて酸素不足の金魚のようにパクパク開けたり閉じたりをくり返していた。

岩場の先には、ぐるぐる渦を巻いている急流があった。そのあたりは信じられないくらい流れが速くて、みんなが

「あっ」

と言った瞬間、みやこちゃんの体は、すうっと流れに飲みこまれてしまった。みるみるうちに流れに乗って、みやこちゃんの姿は赤い金魚になって小さく見えなくなっていく。

「いやあああ」

と空気を引き裂くキミエちゃんの叫び声。子どもたちの中で一番おねえちゃんので、大

人からも、子どもからもたよりにされている  
キミエちゃんが泣き出してしまい、わたしは  
どうしていいのかわからなくなってしまった。

「みやこお！岩につかまれよーっ」

ケンゴは叫びながら、走りやすい土手の草  
っ原を、すべるように駆けていった。

キミエちゃんはひざを抱えて泣き出してし  
まうし、わたしはおろおろするばかりだった。

大人を呼びに行った方がいいのかな。どう  
しよう。おねがだから泣かないで、キミエ  
ちゃん。と、なぐさめていると、ドブンと誰  
かが川に跳びこむ音が聞こえた。わたしは立  
ち上がって、音のした方を向いた。

はげしい流れの中で、岩の間を浮いたり、  
沈んだりして見えた頭は二つにふえていた。

最初はなれて見えた二つの頭はどんどん近  
づいて、上半身はだかの男の子が、みやこち  
やんを片腕で抱えるようにした。そして流れ  
に逆らうように、みやこちゃんを左わきに抱  
えたまま、すいすいと平泳ぎをはじめた。

わたしはビツクリしていた。ケンゴって、こんなに泳ぎが上手だったんだ。飛行機にひとりで乗れるだけじゃない、本当のスーパー小学生だったんだ、って。

そして二つの頭は、ぐんぐん急流からはなれて、大きな腰かけ岩のある川辺に到着した。

川べりに立つ二人の姿を見て、わたしはもつとビツクリした。だってそれはケンゴじゃなかったから。ぬれそぼった二人の近くに肩で息をしているケンゴが立っていた。

わたしはキミエちゃんの手を引っぱって、三人がいる場所に駆けよった。

みやこちゃんは泣きはらした真っ赤な目で、でもいったい何が起きたのか状況がつかめていないようで、みんなに囲まれて、ぽかんとしていた。

「ありがとう。すごいな、おまえの泳ぎ」  
ケンゴがお兄ちゃんらしく、さいしよにお礼を言った。

その声に反応して、みやこちゃんは頭から

しずくをたらしめている男の子を見上げた。

「あ……ありがとう。えつと……」

みやこちゃんの口が、それに続く言葉を探してもぞもぞしていた。

すると男の子は、

「やだなあ。名前おぼえてよ。平太だよ。水なんて平気の平太！」

そうだ！平太だ。なんで忘れちゃってたんだろう。みんながそろってにっこり笑った。

みやこちゃんは、水をはじくような笑顔で

「へー夕にいちちゃん、ありがとう！」

と大きな声で言った。

ホッとすると同時に急にお腹が空いてきて、わたしたちは、おばあちゃんと文子ねえちゃんを作ってくれたお弁当を食べることにした。

しばらくの間グズグズと鼻をすすっていたみやこちゃんも、おにぎりを一個食べ終わるころには、いつもの笑顔にもどっていた。

おばあちゃんのお弁当は、魔法の麦茶より百倍くらいよく効いて、みんなぐんぐん元気

をとりもどしていった。特に卵焼きはダシも  
甘みもちょうどよくって最高だった。

「ヘータにいちちゃん、泳ぐのスゴくうまい  
ね」

「うん、泳ぐの好きだからね」

「平太、何年生なの？ぼくは四年生」

と、ケンゴ。

「うん、ぼくは三年生だよ」

「じゃあ、わたしといっしょだね」

その時、あれえ。と、キミエちゃんがとん  
きような声を出した。

「どうしたの？」

と、みんなはキミエちゃんに注目した。

「キュウリがっぱい入っていたのに、なく  
なっているんだ。おっかしいなあ」

すると、みやこちゃんもハツとして、自分  
のひまわり色のリュックの中を探しだした。

「みやこのキュウリもない。文子ねえちゃん  
がくれたキュウリ！」

そこでわたしたちは、川に来た目的を思い

出した。そうだ。わたしたちは、河童を探しに来たのだ。

「もしかして、河童が現れたのかな？」

ケンゴが声をひそめた。

みんな、口の動きを止めて、めいめい考えをめぐらせているようだった。

ミーン、ミン、ミーン、ミン……

もくもくとおにぎりをはおぼるわたしたちの上、天狗が住むという山から、セミの鳴き声が降ってくる。お天気をめぐまれて、川かせせらぎは、清らかでおだやかだった。



たっぷり遊んでもどって来ると、おばあちやんが軒先で待っていた。縁側に置かれた木のたらいには水がはってあって、大きなスイカが冷やされていた。その横にはビニールの袋にきれいに並べられた花火セットが二つ。最後の夜の花火は、子どもだけのお泊まり会の、お決まりのイベントだった。

「おやおや、みんなずぶぬれになって。ほら、

スイカ食べるから、手を洗って、浴衣にお着替えしておいで」

おばあちゃんの声を合図に、みんな先を争うようにして風呂場に駆けこんで、われ先にと手と足を洗った。

浴衣は文子ねえちゃんが着せてくれた。文子ねえちゃんが小さいころに着ていた浴衣なんだって。今この田舎に残っているのは高校生の文子ねえちゃんだけだけど、文子ねえちゃんが小さかった何年前は、たくさん子どもが住んでいたんだって。大人になって仕事をみつけて、ここを出て行っちゃった、その子たちが子どものころに着ていた浴衣。

花火の係はケンゴだった。ケンゴは大張りきりで、花火の先にろうそくの火をつけては、ひとりずつに渡してやっていた。小さなみやこちゃんは、大きな目をさらにひとまわり大きく見開いて、その様子を見つめていた。

「今日は特別だぞ」

と、ケンゴがみやこちゃんに花火を渡した。

するとみやこちゃんはヒマワリが咲くように  
にっこり笑った。いつもは危ないからって、  
花火を持たせてもらえないんだって。

それから文子ねえちゃんも加わって、みんな  
なしてきやあきやあと奇声をあげながら、花  
火を楽しんだ。平太ひとりが花火がこわいこ  
わいと言って逃げ回っていた。すごい泳ぎで  
みやこちゃんを助けた今日一番のヒーローな  
のに、ひゃーひゃー言いながら遠くまで逃げ  
るので、その様子がおかしくて、みんなでお  
腹を抱えて笑った。

そのうち花火の先のアスファルトが白くな  
ることに気づいたケンゴが、アスファルトの  
上に白い文字で自分の名前を書いた。みんな  
それを真似て、それぞれに自分の名前を玄関  
先に書きはじめた。その周りを四角く囲って、  
花火をこわがる平太のかわりに、ケンゴが最  
後に『平太』と書いて、五人の名前の並んだ  
大きな旗ができあがった。

名前がそろったところでちょうど花火もな



くなつて、わたしたち、つまりわたしと、キミエちゃん、ケンゴ、みやこちゃん、平太は、五人並んで記念撮影をした。



夜もふけて、わたしたちは、すっかり遊びつかれていた。なんと言つても、朝から探検隊気どりで川に出かけて、めいっぱい水遊びをしたうえに、みやこちゃんがおぼれかかるという大事件だ。しかも帰ってくるなり、花火で大きわぎしたものだから、お風呂からあがると、みんななくたくなつていた。

今日あつたことをひとつずつカードのように並べておしゃべりをしたいのに、まぶたになにか乗つかっているみたいに重い。

わたしたちは、ひとつの蚊帳の中に集まつたけど、いつの間にかみんな眠つてしまった。最後にお風呂からあがってきたのは、誰だったんだろう。誰かがぱちんと明かりを消してくれたのは、なんとなく覚えている。

蚊帳の中には布団は二組しか敷いてなかつ

たから、わたしたちは枕のあるなしも、上下左右も関係なしに、布団の上で川の魚のように折り重なって寝ていたようだ。

朝になって目覚めると、平太だけがいなかった。きっとお母さんかお父さんが早くに迎えに来たのだろう。キミエちゃんも、ケンゴも、みやこちゃんも、特に気にしていないのか、誰ひとりとして平太のことを言わなかったから、わたしもそのままにしておいた。

ふしぎなことが、ひとつ。

布団の一部がバケツの水をこぼしたみたいで、びしゃびしゃに濡れていた。みやこちゃんのおねしよかな、とキミエちゃんが笑ったけど、おしつこのにおいはしなかった。

みやこちゃんもお迎えに来たお母さんに、「おねしよじゃないよ。だって、パジャマはぬれてないでしょ」

とうったえていた。

言われれば、なるほどそうだった。だけど川で着ていた赤い水着が、朝起きたときに畳

の上にそのままにあつたから、

「きつとこれのせいよ、ダメじゃない、昼やお布団をぬらしちゃあ！」

って、叱られていた。

みやこちゃんは、出会いがしら大好きなお母さんに叱られて半べそをかいていたけど、今からケンゴと三人で水族館に行こうね、とお母さんに声をかけられると、鮎みたいにぴよんと飛びはねた。

それからお昼をまわると、キミエちゃんのお父さんも車でお迎えに来た。

わたしとキミエちゃんは、

「また来年ね」

と大きく手をふってお別れした。

最後に登場したのがわたしのお母さんだった。お母さんは車で迎えに来てくれた。

「お土産に今朝採ったキュウリを用意してただけだねえ、ごめんね。見当たらなくてね」

「そんなおかまいなく、おかあさん」

ヤカンのように滾った車の前でお母さんはおばあちゃんと大人の会話をしていた。

それからお母さんが運転席に乗りこむと、わたしはおばあちゃんに駆け寄って、

「きつと河童が持って行っちゃったんだよ」

と耳打ちした。おばあちゃんは、きつとそうだねえと言って、にっと笑った。おばあちゃんの笑顔に見送られて車は発進した。

「いつき、どうだった？楽しかった？」

文子ねえちゃんの家を曲がったあたりでお母さんがたずねてきた。

「うん！」

「花火もやったの？」

「うん、もちろんだよ！だって、それは最後の夜の決まりだもん」

「あとは？いつもとちがうことはあった？」

わたしはちよつと考えた。河童探しに行つたことは話したいけど、川でみやこちゃんがおぼれかけたことは、言わないほうがいいよね……。そんな危ないことになるんじゃないよ

う子どもだけのお泊まりはいけません！なんて言われかねないもの。

「えっとね。川で遊んだよ。おばあちゃんが  
お弁当作ってくれてね。五人で河童を探しに  
行ったんだ」

「河童？へえ、河童ねえ。そりゃ、楽しそう  
だけど。……で、五人って、文子ねえちゃん  
もいっしょだったの？」

「ううん。子どもだけだよ」

「五人？あっちでお友だちができたの？」

わたしは何を言っているんだろうと思った。  
お母さん、ボケちゃったのかな。

「五人だよ。わたしと、ケンゴとみやこちゃ  
んの兄妹、キミエちゃん、平太！……ほら  
ね」

赤信号で車が止まると、お母さんはわたし  
をカエルのような目で見た。

「だれ？ヘイタって」

「だれって、親せきの子でしょ」

お母さんは信号を気にしているのか、いそ

がしそうに目をキョロキョロさせていた。

「ああ、そうか。いつきつたら、さつきまで寝てたから夢の話でもしてるんでしよう？」

お母さんはそう言っけてラケラ笑った。そう言うお母さんこそ暑さぼけしているんじゃないかなって、わたしは思った。

それから一ヶ月後に文子ねえちゃんから手紙が届いて、その中に最後の夜、あの花火のときに撮った写真が入っていた。さっそくお母さんに見せて、ほら、これが平太だよ、って言っけてやろうと思った。……だけどね。平太は写っていないかったんだ。泳ぎが得意で、川でおぼれかけたみやこちゃんを助けてくれた『水なんて平気の平太』は、写真に写っていないかった。

しかも、文子ねえちゃんの手紙の最後にはこう添えてあったんだ。

——来年もキミエちゃん、いつきちゃん、ケンゴくん、みやこちゃんに会えるのを楽しみにしてるね。またいっぱい遊ぼうね。

って。そこにも、平太の名前はなかった。  
わたしは穴があくんじゃないかってほど写真を見つめた。そうしたら、あった。わたしたち四人が写っている足もと、花火で書いた大きな旗の中に並んだ名前。よく目をこらして見ると、ほら！書いてある。『いつき』  
『キミエ』 『ケンゴ』 『みやこ』 『平太』 っ  
て！平太はね、泳ぎがすごく上手な男の子なんだよ。〈了〉